
或る名探偵の苦悩

紅波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る名探偵の苦悩

【Nコード】

N7893E

【作者名】

紅波

【あらすじ】

帝丹高校のとある日常——嵐は突然やってきた！ヘタレな名探偵と一枚上手な科学者のお話し。新志です。

なんの変哲もない、春の穏やかな日常。平日、月曜日、麗らかな昼時。

——嵐は突然やって来た。

「——くーどーうー！！工藤工藤工藤——！！」

「だああああ！！うっせー！回言やわかるっつーの！！」

バタバタと廊下が騒がしいと思うと、自分の名前を大声で叫びながらクラスメイトが教室に駆け込んでくる。

昼食のサンドイッチを摘みながら、事件の資料を読んでいた新一は思わず立ち上がって怒鳴る。

つい最近復学したばかりの元行方不明名探偵は相も変わらず事件解決に忙しいらしい。

普段ならば教室にまで事件を持ち込むことは無いのだが、今回は相当立て込んでいるのか《殺人事件》などと書かれたファイルが机上に3〜4冊置かれている。

「おーまーえー！毛利だけじゃ飽きたらず美人なオネーサンとお茶してたって本当かあああ！？」

駆け込んで来た3人の男子のうちの1人にそう問われて、缶珈琲でサンドイッチを流し込んでいた新一はそれをぶはつと吹き出して咽せる。

「汚え！」

「げほ、なんだそのガセネタは！つーかそもそも『毛利が…』のくだりからおかしいだろが！」

その新一の言葉に教室の後方でたむろして弁当をとっていた園子が、ちよつと！と突っかかるが、蘭がそれを静かに諫めた。

「惚けたって無駄だぜー工藤！A組の斎藤が土曜日に駅前の喫茶店で美女と仲睦まじく談笑してるお前を目撃したって言ってんだからな」

年貢の納めどきだぜ！ふははははー！…と勝ち誇っているクラスメイトは放置し、新一は思考を巡らせる。

（…土曜日…？…ついたら志保の買い物に付き合っ…）

「はああ！？美人のオネーサンって彼奴のことかよ？」

「うお、いきなり叫ぶな！…ん…？彼奴…ってやつぱり知り合いか知り合いなのか！いや知り合い以上の関係なのか！？」

「頼むから落ち着けオメーは。…つか彼奴美人か…？いや…まあ美人だよな」

「ちよつとちよつと！さっきから聞いてれば工藤くん！？その彼奴って誰なの？」

「あ？あー…えつと彼奴って言うのはだな、みや…」

宮野志保、と言いかけて新一はたと停止する。
そういえば。

「巻き込まないで頂戴ね」

買い物帰りに寄った喫茶店でアールグレイを一口飲んでから、普段
そうそうお目にかかれないような笑みを湛えて、彼女が唐突にそう
言った。

「へ？」

それまでの流れをぶち壊す脈絡ない言葉に呆ける新一をよそに、志
保は続ける。

「事件吸引体質は勿論のことだけれど…きっとこれから貴方が学校
生活送っていく中で些細なことでも私が話題にのぼるのは必須でし

よう？そのとき無駄に迷惑を被るなんて絶対にイヤ」

「…はあ…で、俺にどうしろと」

「ホイホイ情報提供しないで当たり障り無い程度に誤魔化すのよ」

「あー？めんどくせえ」

「嫌ならいいのよ？丁度新しい実験体が欲しいと思っ」

「わかりました全力を尽くします全知脳を総動員して必ずや」

「…わかればいいのよ」

「みや…みや、み、宮城から来た依頼人でだな。その…依頼を」
「マジかよー！それで美女とお茶…羨ましすぎるぜ名探偵！！！」

（まさか学イチ人気の蘭をふってまで手に入れた俺の大事な大事な恋人ですなんて死んでも言えねー）

「…依頼人？…新一？それって志保さんじゃないの」

新一の言葉に蘭がきょとんと首を傾げて問う。

うわああと奇声を上げて彼女の声をかき消そうとするも時既に遅し。

「志保さん！？やっぱり工藤知り合いなのかコノヤロウ！」
「や」

「誤魔化そうとしやがったなコラ」

「その」

「卑怯の藤木クンかコラ」

「なにがだ」

「友達の縁切るぞコラ」

「手厳しくね？」

「アドレス教えるコラ」

「なんでそうなる」

「紹介しろコラ」

「待て待て待て待て！！」

「「「おっじゃまっしまーす!」「」「」

「……」

「えーと」

阿笠邸、玄関。

「……遺言は？」

「取りあえず平和的解決は望めマセン？」

てか取り敢えずその怪しげな液体はいつた注射器おいてみよう宮野
サン、言いながら新一が後ずさる。

「巻き込まないで頂戴って、言っただわよね？」

にこりと笑って問いかける。

「俺は努力はした。不可抗力並びに友情という名の免罪符を前に為すすべが無く、」

志保は無言で注射器の空気を抜くべく上に向けた針先からピュツと液体を発射する。思わず新一は再び後ずさった。

まさに蛇に睨まれた蛙状態である。

「あの、初めまして！俺たち工藤のクラスメイトなんツス。宮野さんのこと工藤から聞いて是非会ってみたいなと思って…」

注射器をしまい初めまして、と微笑んで返す美人にへらへらと顔を緩めるクラスメイトから視線を移して、新一をちらと見やる。

「…へえ…工藤くんから聞いて、ね…」

その言葉にふるふると首を全力で横に振ると、新一は慌てたようにクラスメイトを押しやった。

「オラオラお前等もう見たろ、紹介したろ。帰った帰った！」

早いとこコイツ等を帰して志保の怒りを鎮めねばとする新一をよそに、クラスメイトたちは、せっかくだからもうちょっとくらいいいだろと上がり込む。

しかも驚いたことに志保は再びにこりと笑って、じゃあお茶を煎れるわねなどと接客室に招いている。

「おい、なにお前招き入れてんだよ!」

「あら、どうせ巻き込まれたんだから印象は良いに越したこと無いでしょう?」

くすりとわらって紅茶を注ぐ。それだけに留まらず、クッキーまで用意している。

「待てコラー!!俺んときはいつも煎餅くらいしか出さねーじゃねえか!」

「当たり前でしょ。貴方毎日のように此処にくるじゃない、毎回クッキーなんて出してたら勿体無いもの」

あっさりと言ったのけた志保に、新一はぐつの音も出ない。

「みーやーのーサン!こっちで一緒に話しましょうよー!」

「ええ、」

紅茶とクッキーを持ってクラスメイトのもとへ行く志保を慌てて追う。

我慢だ我慢。

連れてきたのは俺だ!!

「いやーそれにしても本ツツ当に綺麗っすねー」

「あら、ありがとう」

「あ、クッキー美味しいー」

「口にあって良かったわ。遠慮せずにどんどん食べていいのよ」

「あれあれ！？宮野さんその髪地毛なんすか？」

「ええ、まあ…ハーフだから」

「マジで！？どうりで綺麗な眼を…」

「肌白いですよねー」

「睫毛長えー」

「だああああ！！！！オメーら帰れー！！！！」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、新一の叫びとともにクラスメイトたちはポイツと放り出されていた。ばたんがちゃりと閉めた扉の向こうでぎゃあぎゃああと喚く野郎どもは無視して、名探偵はぜえはあと肩で息をする。

「…なにがしたいのよ貴方は」

新一を呆れたように見て、志保が溜め息を吐く。志保の様子に反抗しようと口を開き、再び嚙む。

「——…なんかムカついた」

「は」

きょとんと目を見張った志保は、新一が言った言葉の意味を理解すると、ぷはつと嘔き出した。くすくすと珍しくツボにはまったらしい志保が笑続けるので、流石に恥ずかしくなったのか新一は頬を微かに染める。

「ふふ、じゃあ今後一切こういったことのないようにすることね」

目尻の涙を拭いつつ、志保が艶やかに微笑む。

「お前…そのつもりでなにもいわなかったな…？」

「あら、いいお灸になったでしょう？たまにはいいんじゃない、はらはらする側も」

いつもは『させる側』なんだから、と付け加える。そうして、リビングへと消えていった。

取り残された名探偵は、その類い希なる明晰な頭脳を以て如何にして明日からのクラスメイトによる猛攻撃を交わそうかと思案を巡らしているのだった。

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7893e/>

或る名探偵の苦悩

2011年2月21日19時03分発行